



第4号 令和4年2月15日発行

社会福祉法人 和歌山つくし会

本部 和歌山県和歌山市吉礼字八ツ井486番地の1  
TEL:073-488-7470  
FAX:073-478-1900

事務局 和歌山県岩出市中迫665  
TEL:0736-69-1772  
FAX:0736-69-5251

## 特集「私たちにできる地域貢献」

1. 理事長 谷本 美佐子 理事長として今思うこと  
「中・長期計画とこれからの和歌山つくし会」

2. 「私たちにできる地域貢献」

つくし医療・福祉センター 院長 飯塚 忠史

3. 「漢字教育を通して感じたこと」

広瀬幼保園 副園長 森美千代

4. 「5つの“トビラ” 5つの“つながる”」

地域連携室 室長 清水 由紀夫

5. 連載

第4回「本人さんはどう思てはるんやろ」  
常務理事 森下 宣明

6. つくしっ子インタビュー！

「和歌山つくし会とともに37年」  
元・桃山療護園 園長 奥 純子 医師

第3回「ダイアログとつくしの未来～  
フィンランドから学ぶ」  
つくし医療・福祉センター  
小児科部長 紀平 省悟

7. つくしっ子ニュース！

其之壱 厚生労働大臣賞受賞 江崎 美代子 長谷 ノリ子  
全乳協永年勤続表彰受賞 和田 由利子 朝間 素美  
和歌山県白梅賞受賞 永岡 佐和子 大西 好子  
和歌山県社協会長表彰受賞 大江 静香 海瀬 麻代  
全社協会長表彰受賞 小栗 旬子  
其之弐 里親支援センター「6waka イブニング」出演！  
其之参 和歌山つくし会 永年勤続表彰

第1回「海外研修で学んだこと」  
つくし医療・福祉センター  
リハビリ室長 川野 琢也

8. つくし会職員入職1年目研修

「この1年の振り返りと2年目の抱負」  
優秀作文 2名

10. つくしっ子  
もふもふニュース！！

「2匹のわんこたちと  
心躍る！もふもふ生活」  
小さな兄と大きな妹  
和歌山乳児院 保育士 小川 綾香



9. 利用者家族の声

「希望の子」  
つくし幼保園 保護者会長 紀岡 進也

11. つくしっ子ミニ歴史  
「一凛の薔薇」

13. 編集後記

12. ある日の乳児院日記

乳児院広報委員



多機能型福祉事業所「つくしの里」の皆さんのアート作品



「紀国和歌山文化祭2021」において気軽に芸術に親しんでいただけるよう障害者交流事業「ふれあいアート体験」が開催されました。その一環である書道アートの出前教室が開催されるという事で、多機能型福祉事業所つくしの里では「家族の方にも声を掛けて盛大にやろう！」ということで企画しました。

開催日は2021年8月3日（火）。ところが、新型コロナウイルス感染症の影響で止むなく中止せざるを得なくなったのです。

そんな折、文化祭推進局の職員の方が「用紙と道具を貸しますのでいかがですか？」と配慮してくれました。利用者とスタッフだけの取り組みになりましたが、利用者もスタッフも全員素足になって思い切り芸術を楽しみました。手足に好きな色の絵の具を塗っては縦1.5m×横3.5mの大きなキャンバスを歩いて足あとをつけたり、手形をつけたりする利用者もあれば、自分の身体くらいの大きな筆で色塗りを楽しむ利用者もいました。

最後のしめは利用者が自分の身体の2倍近くある巨大な筆で渾身の力を込めて「和」という文字を書きました。和歌山の「和」、つくし会の「和」、なかまの「和」という意味が込められています。

こうして1時間に及んで出来た大作は文化祭の間、和歌山ビッグ愛で展示されました。そして1ヶ月に及んだ文化祭の終了と共に私たちのもとに戻ってきたのです。

そして今、この大作をたくさんの人の目に触れてもらいたいという思いから、つくし医療・福祉センターの1階に展示させていただきました。

この作品からほんの少しでも何かを感じたり、想ったりしていただけたら利用者もスタッフも感無量です。 多機能型福祉事業所所長 濱田拓也



## 理事長として今思うこと 「中・長期計画の策定とこれからの和歌山つくし会」

社会福祉法人 和歌山つくし会

理事長 谷本 美佐子

和歌山つくし会は2019年に社会福祉法人設立50周年を経て、新たな50年に向かって「つくす」という理念とともに、次のステージに踏み出しました。

これまで慢性的な人手不足に悩まされながらも、昭和、平成、令和と3つの元号が移り変わる長い歳月を職員の皆さんと一丸となって乗り越えて参りました。

創設期から中期までの間はまだ社会福祉という概念があまり一般的でなかった時代、まさに手探りの状態で地域の必要性和期待に応え、5つの施設がつくられたのは画期的な出来事でした。

その後に至る発展期には施設の合併や建て替え移転、未来へのエネルギーに溢れ、そのインパクトは大変なものであったことでしょう。その後も、皆さまの努力の賜物で、現在も各施設ともに地域の信頼を保ちながら、経営的には成熟期に入っていると考えています。

さて、外部環境に目を向けてみますと、日本は世界でも有数の医療、福祉の素晴らしいシステムを持つ国ですが、2025年の少子高齢化社会から2040年の人口減少社会に向かい、様々な問題が山積しています。そして、現在、社会福祉法人には未来に向けて種別を超えた活動が期待されています。障がい者、子ども、高齢者、そして世帯を包括的に支援するサービスなどによる一層の地域貢献が期待されており、社会福祉の重要性は今までも増して高まっています。

その中で現在私たちはつくし会の理念に基づき、より明確な経営計画を立てるため、それぞれの施設が心を合わせ、現状分析を行い、将来の姿を思い描き、前進するための中・長期計画を作成しています。和歌山乳児院、つくしの里子ども園、広瀬幼保園、つくし幼保園、和歌山つくし医療・福祉センター、これらの施設の将来の大規模修繕や建て替えなどに備え、また事業の発展の可能性やシステムの見直しなども交え、改善点を模索しています。

和歌山つくし会はこれまでの経験と実績を集大成し、50年後に再び福祉の心を次の時代に引き継ぐことを目指し、地域の皆さんと共に歩んでまいります。

**まさにこれからが正念場！**

イタリア語で若者のことをRagazzo（ラガッツォ、女の子はラガツァ）と言いますが、実際は高齢者になってもイタリア人達は自分のことを《魅力にあふれたRagazzo》だと思っています。私達もRagazzoの精神をいつまでももち続けましょう！





## 「私たちにできる地域貢献」

つくし医療・福祉センター

院長 飯塚 忠 史

「貢献」という言葉を使うと「かみしも」（江戸時代の武士の礼装）を着た印象があり、畏（かしこ）まってしまう。そもそも「貢献」とは①みつぎものを奉（たてまつ）ること②力を尽くすこと。あずかって力あること。寄与。「社会の進歩に貢献する」（広辞苑）ということらしい。「貢献」とは社会貢献など少し仰々しい言葉です。それに比べ「地域貢献」とは最近できた言葉であるようです。大分崩して表現すると「地域との日ごろからのお付き合い」と言えます。社会貢献ほど大きくない。つくし会の皆さんは日ごろのお仕事のなかで、立派に保育・福祉・療育等で、社会貢献を行っている。「地域貢献」はもっと顔の見えるご近所関係であり、お互いに楽しめるようなものではないでしょうか。

地域貢献には「1. 施設に来ていただくもの」と「2. 施設から地域に出かけていくもの」があります。「1. 施設に来ていただくもの」では、今までもつくし医療・福祉センター開催のスペシャル・コンサートや夏祭りがありました。これらを今まで以上に地域住民に開放したらどうでしょうか。自分の住んでいる地域に日頃と違う異次元空間が出現することは、住民や子どもたちにとっては素晴らしい思い出になるでしょう。子どものころの思い出は今でもワクワクします。障がいのある人々と祭りを楽しむことは将来の共生社会へ向かうものになるでしょう。では「2. 施設から地域に出かけていくもの」では何があるでしょうか？私は日ごろからつくし会で働いているスタッフが様々な趣味や、日ごろ使わない技術を持っていることに驚いています。そんな趣味や技術を地域住民に開放したらいかがでしょうか。県立医科大学や県庁がしている「出前講座」の真似ごとです。例えば、「一緒にバレーボールを練習しましょう」「ボウリングを一緒にしませんか？」「お子さんにカブトムシのたくさんいるところを教えます」「野菜の育て方をお教えます」「家のリフォームを一緒に考えましょう」「マラソンを始めませんか？」等々をホームページに載せます。申し込みがあれば担当を決めてマッチングを行います。実行日が決まったらつくし会から協力金が出るかもしれません！？つくし医療・福祉センターにはボランティア活動で手話を18年間も教えている大先輩がいます。多機能事業所で働いている濱田君です。このような活動で、地域住民の方々はつくし会にいろんなスタッフがいることに気付いて、つくし会は地域と顔のみえる関係になります。さらに災害時の助け合いにもつながっていくでしょう。

さて、「私にできる地域貢献」は何でしょう。私は昔から仕事ばかりで近所付き合いも苦手です。水路の掃除も地区の班長も我が家の「奥様」がしてくれた。まったくのダメ爺じ（じーじ）だ。唯一思い当たるのは愛犬パトラの散歩のとき、パトラがそこら中にして回る「うんち」を片付けて、通行人が踏まないようにすることです。歳をとったら周りに迷惑をかけないことに専念します。





## 漢字教育を通して感じたこと

広瀬幼稚園

副園長 森 美千代

広瀬幼稚園では平成19年度から『石井式 漢字教育』を取り入れています。教育学博士・石井勲先生の教育実践から生まれた優れた指導法で、『社会で一般に漢字を用いて表記している言葉は、子ども達にも始めから漢字表記して提示する。』という基本原則に従って行う『漢字で教える』教育です。

私は、つくし保育所（現・つくし幼稚園）で計24年勤務させていただいた後、広瀬保育所（現・広瀬幼稚園）に異動となりました。当初は保育所らしからぬ漢字だらけの環境に驚き戸惑いでしたが、この漢字教育の理解を深めていくうちに自然に漢字に触れ、生き生きとした表情の子ども達を見て、子どもの可能性を最大限に広げることができる教育法であることを実感するようになりました。

年少以上児は「漢字仮名交じり絵本」を使って繰り返し読むうちに、自然に漢字が読めるようになったり、「名前漢字カード」を使っての出席確認は0歳児から行っているため、毎日の繰り返しの中で自分の名前の漢字だけでなく友達の名前の漢字も分かるようになり、得意気に保護者に教えたりしている姿も見られます。

また、一日の始まりに「腰骨を立て、姿勢を正し、心を落ち着かせる『立腰教育』」も併せて行うことにより、静と動のメリハリの利いた保育ができています。卒園後、保護者の方から「小学校の先生から、『とても落ち着いて勉強に取り組んでいます。』『多くの漢字を知っていて、積極性があります。』」と言われました。」と嬉しい報告もありました。

2020年から小学校では外国語（英語）が必修化されるなど、国際社会で活躍するためには小さい頃から外国語に親しむことは大切だと思います。それ以上にまずは母国語を大切に、日本語の豊かな言葉、美しい言葉に幼児期から触れることが豊かな心、美しい心を育てるのではないかと考えています。

特に幼児期は何でも遊びから学んでいきます。漢字は一見複雑そうですが、それ故に識別しやすく具体的な意味や内容を表しているため、幼児には絵を見るのと同じように理解でき、パズルのようにゲーム感覚で自然に多くの言葉や漢字を覚えてしまいます。

長年子どもたちと接してきた中で、子どもたちの豊かな感性に触れ無限の可能性を感じてきました。広瀬幼稚園で新たな教育法を知り、子どもたちの笑顔や楽しい声を聞きながら、人生の大切な基礎である幼児期の教育に携われることに感謝しています。



## 「5つの「トビラ」、5つの「つながる」」

つくし医療・福祉センター 育成課長

つくし相談支援事業所所長 **清水 由紀夫**

2021年4月、つくし医療・福祉センターに新たに「地域連携室・つくし相談支援事業所」準備室が開設されました。病院としての地域連携室の役割と障害福祉サービスの一つである特定相談支援事業所・障害児相談支援事業所の役割を併せ持った事業所です。

現在、相談支援員（相談支援専門員）3名、看護師1名（6月より訪問看護との兼務配置）、医療クラーク1名の5名体制となっており、10月からは準備室ではなく正式な事業所として運営しています。

事業所の理念としては、障害の有無や障害内容を問わず、相談支援を通して、共に生きる地域社会、豊かな福祉社会づくりを目指しています。

相談内容としては、①基本相談（医療・福祉に関する初期相談、どことつながるのか？誰とつながるのか？何とつながるのか？何故つながるのか？分からない、ただ話を聴いてほしい等）、②医療とつながりたい（つくし医療・福祉センター内の診察、診断、リハビリ、心理治療、発達診断、療育手帳、身障手帳、障害者年金等を取得するための診断書交付、訪問看護のサービス調整等）、③福祉とつながりたい（各種障害福祉サービスを受けたい、計画相談を行ってほしい、日中一時支援や短期入所、長期的な施設入所、訪問介護、児童発達支援、生活介護事業等を利用したい、つくし以外の障害福祉サービス事業所との利用調整等）、④学校とつながりたい（学校と家庭の関係を良好にしたい、保育所等訪問支援の利用、学校からの相談支援、診察、診断、リハビリ、心理治療、発達診断等）、⑤社会とつながりたい（学校卒業後の生活が心配、施設入所から退所して在宅で過ごしたい、発達障害児・者の医療から福祉への移行、入所利用者の退院移行支援等）など、5つの相談支援を主としています。ご本人様やご家族の皆様がお気軽に、この5つの「トビラ」をたたいて入って来てもらえれば、5つの「つながる」支援によって、人と人、人とサービスをつなげることが出来、地域社会の中で楽しく豊かな生活が送れるようになるのではと考えています。

現在、地域連携室・つくし相談支援事業所では、外来診療における発達障害児の初診診察の待機問題、中・高校生等の高年齢児童の医療から福祉サービスへの移行問題を抱えており、また重症心身障害児・者や医療的ケア児・者においては、医療的ケア児支援の法整備によるさらなる支援の推進等、多くの難題、課題を抱えており、つくし医療・福祉センター内外の方々やご家族の方々の声を聴きながら解決していきたいと考えています。

まだ産まれたてのひよっ子ですが、大きく成長して羽ばたいていけるよう、あたたかく見守っていただければ嬉しいです。



## 連載 第4回

## 「本人さんはどう思てはるんやろ」

社会福祉法人 和歌山つくし会

常務理事 森 下 宣 明

突然ですが、心臓の冠動脈バイパス手術のため、1か月余り入院しました。

体調が、いつもと違うなという気づきは何度もありましたが、少し休むと回復したので、疲れからくる一時的な症状ではないかなと思ひ、特に糖尿病の治療のため通院しているクリニックの先生にも相談することはありませんでした。

ところが、この秋、毎年恒例となっているマツタケ狩りに、いつもの山に行った時、少し歩くと、息切れと胸の痛みがあり、休んでも、なかなか元に戻りませんでした。幸い、山からはマツタケと共に無事に生還しましたが、同じことが1週間後も起こりました。

これは何か変だと思ひ、10月4日に、いつものクリニックでX線と心電図を撮ってもらい心臓の専門医の受診を進められました。専門医院でのCT撮影(11日)で冠動脈の詰まりが発見され、当初はカテーテル検査(15日)をして治療する予定でしたが、検査の結果、バイパス手術(21日)での治療となりました。

その間、職場には、いろいろとご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございませんでした。

幸い、手術も無事終わり、術後のカテーテル検査でも異常が発見されず、11月17日に退院することが出来ました。現在は自宅療養中ですが、ときどきリハビリも兼ねて、職場に顔を出させていただいています。

1か月余りの入院中は、コロナ禍でもあり、面会は一切禁止、時々、着替え等を持って来てもらう場合も、事務所を通しての受け渡しという事で、直接、家族と会うこともできませんでした。

入院期間中は、いろんなことを考えました。特に、現在、法人において検討している中・長期計画において、医療型障害児入所施設に入院している方々が、長期にわたる入院を、どう考えておられるのかを、そして、計画の中に、どう組み入れるのかを。

びわこ学園初代園長故岡崎英彦先生がおっしゃった「本人さんはどう思てはるんやろ」という言葉が今も胸を打ちます。当時びわこ学園で働いていた職員が、重症心身障害児との接し方で悩んで、園長先生に相談した時に、おっしゃったという言葉です。

言葉やジェスチャーで意思表示ができない方々の想いを汲むことができるか、できないかで、その後の関わり方が変わってくることを。

現在では、その当時とは比べようがないくらい、重い超重症児と呼ばれる方々の入院も増え、生活の中に占める医療・看護の割合も高くなってきています。

一方で、50年以上も入院している方々もおられ、終の棲家としての役割も果たさなければならぬと思ひます。

和歌山つくし会が、地域の中で果たさなければならぬことはたくさんあります。今後とも地域の期待に応えられるよう、皆様と力を合わせて取り組んでいきたいと思ひます。

今回の入院で助けてもらった命、もう、少しだけ頑張れよと、後押しされたような気がしています。





## 連載 第3回 ダイアログとつくしの未来 ～ フィンランドから学ぶ

つくし医療・福祉センター 小児科部長 **紀平省悟**

### ■フィンランド流ダイアログ事始め

きっかけは2015年、20年来の友人である高木俊介さん（京都の精神科医）の誘いでした。2016年に彼のクリニックで開かれたトム・アーンキルさん（ヘルシンキ大学名誉教授、歴史小説家）の集中トレーニングに準備段階から加わり、好奇心と憧れは強まるばかり。2018年2月初旬にはフィンランドに渡り、前半3日を『オープンダイアログ』、後半を『未来語りのダイアログ』を学んで過ごしました。いまや世界中から熱いまなざしを浴びているオープンダイアログは、ほんらい精神科の急性期対応、一方、未来語りのダイアログは、教育現場が源流ですが、困難を抱えた子ども、青年、家族、高齢者ケアや施設入退所、就労支援など、じつにさまざまな教育・福祉現場に導入されています

### ■オープンダイアログとケロプダス病院（トルニオ、西ラップランド）

雪深い厳寒の候に私たちが訪れたケロプダス病院はスウェーデンとの国境の街トルニオに位置します。70年代初頭までは、精神障害や知的障害の人たちが長期入院する精神病院でした。80年代の医療改革で施設統廃合の嵐のなか、院長アラカレと心理師セイックラの二人は、患者や家族ひとりひとりの人生についての語りに耳を傾けるという実践を始めました。やがてその臨床的意味が職員全体にも理解され、のちの家族療法（心理療法の流れのひとつ）の院内研修システムを実現させたのです。いまでは心理士だけでなく、ナースの大半もまた3年間の研修を経てセラピストとして働くようになっていきます。

ケロプダスでは、家族から依頼を受けたセラピストは速やかに治療チームを編成します。チームメンバーには複数のセラピストだけでなく、患者、家族、家族の支援者や知人などが含まれ、このチームが主に患者宅で対話をします（必要なら初回は24時間以内）。そこでは多様な声への傾聴と共感的理解が尊重されます。互いの声はかき消されることなく、合わさって1つになるのでもなく、異質な声が共存する「ポリフォニー」が立ち上がり、個々人に全く別の展望がひらける…。これがオープンダイアログです。

その前史には、入院患者の家族を招いて話を聞く、職員全員参加型ミーティングがありました。職員の前で、家族は人里離れた施設に肉親を連れてきた遠い昔日の記憶をまるで昨日のことのように生き生きと語ります。そんな取り組みを彼らは深化させていきました。それは人と人の間の「水平性」、「平等性」、「透明性」の重視につながり、組織を変えました。のちに結実す

る「専門職だけで方針を決めない」という原則。この誇らかな決意表明は1984年8月14日のことでした。その後、西ラップランド地域の入院や薬の使用量だけでなく発症率さえ抑えられ、就労が改善していったのです。

現在の日本で彼らのやり方をそのまま真似ることは不可能です。残念ながら、まだ私たちはフィンランドの80年代以前の段階にいると思います。

### ■未来語りのダイアログと地方都市ヌルヴィヤルヴィにおける実践

ヌルヴィヤルヴィは首都ヘルシンキの北約37kmにある緑豊かな田園都市。人口4万人規模と、岩出市に似ています。私たちが訪れたのは福祉相談事業所と隣接する高齢者・子どものデイケア・センターでした。2000年代初頭、人口が急増し、学校も福祉も人材も何もかも足りなかったことが、新しい社会福祉の形の背景になったそうです。役場が信頼されるためには、きちんとした連携、とくに当事者である本人・家族、当事者に「近い人達」と協働する必要性が認識されたのです。



### ■懸念・心配を取り上げる

その後、日本でさらに長いトレーニングを受け、実践してみて思い知ったことがあります。困った時、人は誰かに相談すると、あれこれ指図をされて、懸念（心配）をていねいに聞いてもらえることはあまりありません。そして相談を受けた人のほうはといえば、ただちに解決策を提案しがちです。でも、それらはまず受け入れられません。互いに背負ってきた過去（つまり価値観・立場・経験・知識・スキル）は容易には共有されないからです。ところが不思議なことに、未来（への懸念・心配・・・じつは希望・期待とセットになっている）は共有されるのです。いろいろな話し合いに出て思うのは、心配が生じたら、早い段階で提案や解決策よりも懸念・心配を共有することの大切さ。それは日常的なダイアログ（早期ダイアログ）として実行可能です。そこで必要なのは互いの問いかけと応答の言葉の丁寧な工夫、相手をリスペクトすること。そして提案や解決策は最後の最後。大きな声だけが支配する組織に未来はありません。それこそがフィンランド人たちが教えてくれたコアの部分だと思います。



## 連載 第1回

## 「イタリアで見つけた共生社会のヒント」

つくし医療・福祉センター リハビリ室長 川野 琢也

内閣府が主催する2019年度の地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」に参加し共生社会について学びを深めてきました。この度、つくしジャーナルに記事を掲載していただけることになりましたので、私が体験し感じたこと、そして共生社会についてシリーズで記していきたいと思えます。

そもそも「共生社会」とは、障害のあるなしだけでなく様々な状況や状態にある全ての人々がお互いの人権や尊厳を大切に、支え合い共に生きる（生活する）社会のことです。今年、2021年は新型コロナウイルスの影響で1年遅れではありましたが、オリンピックとパラリンピックが東京で開催されました。スポーツや平和の祭典のイメージが強い両大会ですが、共生社会を目的とした大会でもありました。両大会には様々な状況や状態の選手が参加していました。日本選手も外国のルーツを持つ選手が多く参加していましたし、難民選手団の参加も特徴的でした。またオリンピックだけで183人の性的マイノリティーの選手が参加していたと米メディアのアウトスポーツが報じています。また、パラリンピックは視覚障害、四肢欠損、上肢や下肢の障害、肢体不自由、そして知的障害など様々な種類の障害を抱えた選手が参加していました。当然ですが誰一人同じ状態の人はいないと改めて認識することができました。両大会を通じてお互いの違いを認め合い尊重し競技している姿勢は、観ている人にも感動を与えたり、勇気づけられたりしたのではないかと思います。

さて「地域コアリーダープログラム」の話に戻すと、このプログラムは3分野（高齢者分野・障害者分野・青少年分野）あり、各分野に携わる日本青年を先進事例のある外国に派遣し各分野の課題対応の方策を学ぶとともに、組織の運営、関係機関などとの連携および人的ネットワーク形成にあたって必要となる実務的な能力の向上を図ることを目的としています。私が参加した2019年度の障害者分野はイタリアに派遣されました。イタリアの先進事例として特徴的なのは、1970年代からインクルーシブ教育を実践しているところです。インクルーシブ教育とは、障害のある児童とない児童が一緒の教室で学ぶ教育です。日本では障害があると支援学級や特別支援学校（旧：養護学校）などで教育を受けることが多いですが、イタリアではその環境が全くないのです。つまり、どんな障害があってもみんな一緒の教室で学習しており、それが40年以上前から続けられています。現在のイタリアの教育現場はどうなっているのか、またこのようなインクルーシブ教育を受け大人になったイタリア人が築く社会はどうなっているのか次回から記していきたいと思えます。



2019年度地域コアリーダープログラム（障害者分野）のメンバーとコーディネーター





## つくしっ子インタビュー！

### 「和歌山つくし会と共に37年！」

元・桃山療護園 園長 **奥 純子 医師**

奥先生は1985年2月1日に和歌山つくし会に入職され、桃山療護園や岩出療育園で医師、園長として長年勤務していただきました。当時、障害者治療はまだ一般的によく知られておらず、障害者の介護は家庭で行われることが多かった時代でした。1981年に国際連合が障害を持つ人々の「完全参加と平等」の実施を世界の国々に呼び掛けた「国際障害者年」は日本の障害者施策に大きな変化を与え、家族中心だった障害者に対する介護の考えが大きく変化しました。まさに過渡期だったと言えます。

そのような時代を「つくし会」と共に歩んでこられた奥先生。

2022年3月に惜しまれながらも退職される先生に、これまでのご苦勞や楽しかった思い出などについてお伺いしたく思います。

1. 奥先生、これまでのつくし会でのご経験など教えて頂きたいことがたくさんありますが、まず先生がつくし会に入職されるまでのことについてお教えてください。

もう40年ほど前のことですが、桃山の山の上で主人と産婦人科医院をしておりました。当時、患者さんが減ってきたこともありましたが、ずっと主人と二人で医院の仕事をしていると、日常的に主人から「あれせえ、これせえ」と偉そうに言われることがよくありまして、ある日「よし、それなら外で働いてみよう」と。

そこで、保健所から子宮がん検診の検診者としての仕事を依頼されたので飛びついたわけなんです。当時は今ほど検診を受ける人はいなくて、検診車で色々なところを回りました。

2. その後、桃山療護園にはどのようなご縁で？

重症心身障害児施設では、施設長が医師でないといけない、という決まりがあったので、私の方に依頼が来たわけなんです。私は産婦人科医ですし、障害児治療のことは何もわかりませんでしたので、最初はお断りしましたが、週1回の勤務で良いから、ということでOKしましたら、その後週2～3回となり、それから毎日の出勤となって、、、。すっかり取り込まれてしまいました！（笑）

当時は現在の和歌山つくし医療・福祉センターの前身である岩出療育園と、桃山療護園の双方医師不足は深刻な状況であったと聞いております。和歌山つくし会は奥先生獲得のため必死だったのですね（笑）

### 3. お仕事の方はいかがでしたか？

障害者医療は当時まだ珍しいことでもありましたし、色々な本を買い倒して読んで、必死に勉強をしました。

そのうち岩出療育園園長の井上隆司先生が病気で長期療養生活になり、岩出療育園にも来て欲しいと言われ、今日は保健所、今日は岩出、明日は桃山、、、という生活が始まりました。

そう、また上手いこと取り込まれてしまったんです！（笑）

岩出療育園と桃山療護園は同じような違うような？療護と療育の違いは難しいです。

毎日あっちに行ったりこっちに行ったり、それは大変な日々でした。

桃山では外来診療もあり、近所の人々が診察を受けに来ていました。

### 4. その中で一番良かったことはどんなことでしたか？

平成20年に岩出療育園が桃山療護園との合併で建て替えられ、奇麗になったことです！

昭和40年代の建物だったので、かなりボロボロになっていたのがびっくりしました！

何と立派で近代的な施設になったことか！

### 5. 一番大変だったことは？

当時は日本重症児福祉協会などの会議に行っても大阪からの参加者はまだ少なかったですね。

大変だったのはやはり勉強しながら治療にあたったことです。

それから当時は夜になると怖いほどカエルの鳴き声が聴こえて、、、

夜間の呼び出しがあった時など、暗い道を小走りに行くと、カエルがいっぱい飛び跳ねていました。入院棟をつくった時にそばに火事に備えて水を貯める堀があったのですね。そこでカエルがいっぱい繁殖していたのです！（笑、笑）

### 6. 何と！？カエルの思い出ですね！（爆笑）それでは先生、これからの和歌山つくし会に望むことは何でしょうか？

もともと高望みはしていませんが、、、。（爆笑）

奥先生、長きにわたり和歌山つくし会のためにご尽力いただき本当に有難うございました。

ユニークな語り口の中にも色々なご苦勞があったことが偲ばれるインタビューでした。

今後も引き続き障害児医療の大先輩としてご指導を頂きたいです。くれぐれもお体を大切になさってください。

## つくしっ子ニュース！ 其之壺



## 令和3年度 厚生労働大臣賞受賞の喜び

和歌山乳児院 保育士 **江崎 美代子**

令和3年度厚生労働大臣賞を思いがけず、受賞させていただきました。

これもこれまで指導し育てて下さいました上司、先輩、支えて下さった同僚の皆さまのお陰と深く感謝しております。

私は、平成10年12月より乳児院で勤務させていただいております。勤務させていただく中で、子どもたちの成長に寄り添い、嬉しいこと、楽しいこともたくさんあり、時には辛い時もありますが子どもたちの笑顔やかわい会話に癒されパワーをもらっています。

これからも、子どもたちに寄り添い、子どもたちのより良い未来のため一生懸命務めさせていただきます。

今後ともご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げますと共にお礼の言葉とさせていただきます。



和歌山乳児院 看護師 乳児部主任 **長谷 ノリ子**

厚生労働大臣賞という名誉ある賞を頂きましたこと身にあまる光栄と存じます。

乳児院で日々働く中、職員の皆様に支えられ、助けられ、励まされてここまで勤めさせていただきました。ありがとうございました。

思い返せば29年という月日が過ぎようとしています。私は、子どもの権利で「最善の利益」子どもにとって最も良いことは何かを第一に考え子どもたちと向き合い、気持ちに寄り添い、共感、共有しながら笑顔を中心掛けて日々保育、看護にあたっています。

入所の子どもの中には言葉、機能等の発達で気になることがあれば担当保育士、院長、看護部長、心理士と相談後、ご多用にもかかわらず、つくし医療・福祉センターの医師（小児科部長）指導のもと、医師、OT、ST、看護師、入所の子どもの、担当保育士、心理士等で気になることを話しあう機会を与えて頂き今年で7年目になりました。気になる気付き、弱み、強みの話の中に専門分野のアドバイスを頂き、参考に取り組み中、子どもとのコミュニケーションが良くなり、子どもと一緒に成長させて頂いています。

これからも慢心すること無く、先輩、同僚の皆様のご指導を頂きながら子どもたちを温かく見守り養育に務めたい所存でありますので宜しくお願いします。





## 令和3年度 全国乳児福祉協議会 永年勤続表彰受賞の喜び

和歌山乳児院 保育士 **和田 由利子**

キラキラ輝く子ども達の瞳に囲まれ、あっという間に16年が過ぎていました。そしてこの度、永年勤続者の表彰を受けこれもひとえに皆様のご支援のたまものと感謝しております。

以前、乳児院は和歌山市の岡崎にあり、側には和田川が流れ、まわりは水田が広がり、交通公園が隣にあるという自然に囲まれた環境で、お散歩に出れば、おもちゃ電車やタマ電車にみんながよく手を振ったものでした。岩出の乳児院は、立派な建物でお庭も広くより安全、快適に過ごさせて頂いております。

最近では、担当していた子ども達が、小学校、中学、高校へ進学し訪れてくれる様になりました。その成長ぶりは、目を見張るばかり感慨無量といった気持ちで、将来の幸せを祈るばかりです。

これからも子ども達が楽しく過ごせる様、一人ひとりを大切に養育に励んでいきたいと思えます。どうか今後共、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。



和歌山乳児院 保育士 **朝間 素美**

この度、永年勤続表彰を頂き、有難うございました。これまで、元気に無事、勤めさせて頂けたのも、ひとえに皆様方のお陰であると心より感謝申し上げます。

これまでの16年を振り返ってみますと、只々子ども達が可愛くて、ひたすら子ども達と歩んできたように思います。子ども達が幸せで、これからの人生が実り豊かになって欲しい。そのお手伝いが少しでも出来たら・・・いくつもの研修を受けさせて頂き、時に社会の現状に戸惑った事もありました。でも、子ども達が毎朝「アサチャン、オハヨウ」と声をかけてくれ、「おはよう～！」と元気をモリモリもらったり、「トントンしっちゃあか？」と寝かしつけるのを一緒に手伝ってくれたり、くしゃみをする「ダイジョウブ？」と心配してくれる、その優しさに嬉しくなります。思えば、いつも子ども達に勇気づけられ、たくさんの事を教えてもらっていたのだと感慨深く思います。

今後も感謝の気持ちを忘れず、乳児院の皆様と共に「子ども達の最善の利益」を心にしっかり留め、毎日楽しく笑いながら過ごして行きたいと思えます。本当に有難うございました。



## 令和3年度 和歌山県 白梅賞受賞の喜び

広瀬幼保園 主幹保育教諭 **永岡 佐和子**

この度は、和歌山県白梅賞を頂きありがとうございます。

これまで指導して下さいました先輩方や、支えて下さった多くの皆様のお陰と、深く感謝しております。

広瀬幼保園に勤務して約35年。0～5歳児クラスそれぞれの担任を経験し、今現在は、主幹保育教諭という立場で仕事に携わっています。

子どもと触れ合う機会は現場にいる頃より減りましたが、日々子どもの成長を感じる事ができる、やりがいのある仕事、環境だと思います。

子どもや保護者を取り巻く環境は大きく変化し、さまざまな課題もありますが、子どもの育ちを一番に考え職員間のチームワークを大切にしながら、私自身今後も更に成長していきたいと思っています。



つくし医療・福祉センター 保育士 **大西 好子**

この度は、白梅賞を頂きましたこと心より光栄に存じます。この栄誉は、これまで自分を指導して育てて頂いた上司、先輩の皆様と自分を支えてくださった同僚の皆様のお陰と深く感謝しております。

私は、昭和58年につくし会に入職し、現在まで39年間勤務させていただいております。

日常生活や日中活動の支援等の療育を行っていく中で、利用者の方が安心して生活が送れるように、看護スタッフと協力して環境整備、日常生活の支援を行っていきたく、思っております。

今後、一層の努力をし、精進して参りたいと思いますので、変わらぬご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。



## 令和3年度 和歌山県社会福祉協議会 会長表彰受賞の喜び

広瀬幼保園 保育教諭 **大江 静香**

これまで、子ども達と笑って泣いて失敗を繰り返しながら共に成長してきました。

私がこの仕事について大切にしてきたことは、子ども達はふいに予測できない行動を起こすことがあり、そんな時に臨機応変に対応できる判断力と行動力を培うことです。

その力を養うには、経験を積むこと、そして人の話に耳を傾け感情をコントロールできるつまり正しい選びができるよう最善をつくし、間違っていた際には素直に認め改善する謙虚な姿勢を常に持つ、バランスのとれた人になることです。

これからも日々自分ができる努力をしていきたいと思います。

このような賞を頂き、長い年月この仕事を続けてこられたのは周りの皆様に支えられてきたお陰だと改めて感謝しております。



つくし医療・福祉センター 保育士 **海瀬 麻代**

この度は、栄えある和歌山県社会福祉協議会会長表彰 社会福祉施設職員功労賞をいただきましたこと、心より光栄に存じます。

この表彰は、私にとって身に余る栄誉であるだけでなく、入職してから今日までの23年間で振り返るいい機会となりました。

この栄誉は私個人の力ではなく、これまでに自分を指導し育てていただきましたたくさんの先輩方や、支えてくださった同僚の皆様のおかげであると深く感謝しております。

今後も人との絆を大切に、仕事に精進して参りたいと思いますので、変わらぬご指導とご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 令和3年度 全国社会福祉協議会 会長表彰受賞の喜び

多機能型福祉事業所「つくしの里」 育成主任 **小栗 旬子**

この度は、栄えある会長賞を頂きましたこと、誠にありがとうございます。

私は、乳児院から桃山療護園、岩出療育園、つくし医療福祉センターと入職以来、仕事や付き合いの場で多くの人に出会いました。上司や先輩、同僚や後輩の皆様そして利用者の方々やたくさんの人たちから多くの事を教わり、経験をさせてもらいました。勤めている間、福祉サービスの変動もありましたが、今後とも多くの人たちにお力添えを頂きながら利用者様にとって安心できるサービス提供をするために頑張っています。

## つくしっ子ニュース！ 其之弐



## 「6wakaイブニング出演！」

里親支援センター「なでしこ」 主任里親支援員 **平 須賀**

里親支援センター「なでしこ」の平と申します。なでしこは平成28年9月から勤務させて頂いています。その前は乳児院の現場で保育士として勤務していました。

なでしこは和歌山県里親会の事務局もさせて頂いています。

この度は「シリーズ人権⑦ 里親支援センターの紹介」で取材を受けました。

この番組は人権に関する和歌山県の様々な取り組みを紹介されています。取材の内容は、子ども未来課の里親についての説明の後、里親支援センター「なでしこ」の紹介をさせて頂きました。又、なでしこ内事務所の様子や和歌山乳児院の外観も収録し、令和3年12月7日(火)「6wakaイブニング」内で放映されました。テレビで放映されると反響もあり、里親制度について又里親支援センター「なでしこ」について、知ってもらえる機会をいただけて、大変ありがたいと思っています。

これからも里親さん・里子さんに寄り添いながら、里親さん・各関係機関と協働してチーム養育を目指して頑張っていきたいと思っています。

里親に興味のある方はなでしこまでご連絡いただければ幸いです。

よろしくお願ひ致します。



## つくしっ子ニュース！！ 其之参

### 令和3年度 和歌山つくし会 永年勤続表彰 33名

#### 和歌山乳児院（7名）

30年 湊 谷 みね子  
 10年 久 保 早 代      古 谷 都司子  
 5年 東      美紗貴      工 藤 宏 美      鍛 治 幸 美      大 江 利 恵

#### 広瀬幼保園（4名）

35年 永 岡 佐和子      森 田 美 幸      山 本 恵理子  
 5年 前 地 優 香

#### つくし幼保園（6名）

20年 荒 川 知 子  
 10年 谷 本 奈美子  
 5年 土 橋 仁 美      下 城 礼 子      玉 置      愛      谷 口 紗 衣

#### 和歌山つくし医療・福祉センター（15名）

25年 中 山 由美子  
 20年 木 村 晴 美  
 10年 澤 田 晃 子      前 原 淳 子      野 呂 朋 加      喜 多 祥 子  
      梶 間 眞 理      三 木 浩 美      生 駒 幸 美  
 5年 中 森 麻 美      高 橋 佐和子      山 田 優 子      児 玉 美 絵  
      玉 置 博 美      井 田 成 美

#### つくしの里こども園（1名）

5年 滝 本 多江子



## 「この1年の振り返りと2年目の抱負」

つくし医療・福祉センター 言語聴覚士 黒田 晋平

2020年4月1日に入職して、最も印象に残っていることは初めて療育棟フロアを見た時です。それまで自分が関わってきた世界と大きく異なるものでした。言語聴覚士（以下ST）の資格を取得する過程で発達障害児や脳血管疾患後遺症患者との関わりは実習や前職で持たせて頂いていました。しかし、重度心身障害児者との関わりは極僅かでした。その僅かな関わりでは、どう関わったらいいか分からないというのが本音でした。当センターでは136名入所されており、つくしの里や外来患者を含めるとさらに多くの方が利用されています。独歩や食事自己摂取が可能でも音声言語でのコミュニケーションが十分取れない方、生活面は全介助でも音声言語での意思表示が明確に出来る方、ほとんどの時間をベッド上で過ごす方等、100人いれば100通りの生活を送っています。それぞれの方の心身機能、特徴、思考、ご家族の思い等を考慮し、専門職としての関わり方を考える必要があると入職1年目で感じました。

1年目で感じたことを踏まえ、2年目ではスキル習得、向上に努めています。具体的にはマカトサイン基礎講習受講、吃音メンタルリハーサル講習受講、STを対象とした摂食嚥下評価講習受講、その他その都度必要な自己学習を行っています。また、1年目で学んだことを改良させることも日々の臨床では取り組んでいます。例えば、呼吸リハビリテーションやプレイセラピーを行う際、1年目は先輩上司からの指導を再現しつつ適宜状況に合わせる事が多くありました。2年目の今年度は1年目の経験を踏まえたうえで新たに学習したことを取り入れるようにしています。また、今の自分の立場は臨床の最前線に立つことだと考えています。既存患者へのリハビリテーションの質が低下しないよう、自己管理しながら新規患者の受け入れを進めていきたいと思っています。

最後にこの2年を総括すると、STとしてどのようなリハビリテーションを提供するかではなく、STとして有している専門知識を使いその人の人生にどのように関わるかを考えたいと思うように気持ちが変わりました。





## 「この1年の振り返りと2年目の抱負」

つくし医療・福祉センター 保育士 中 林 紗里奈

この1年つくし医療福祉センターで働いて様々な経験ができた。保育士でありながら初めての介助に最初は四苦八苦しながら業務を行っていた。食事介助だけでも、個々の呑み込みの特徴やこだわりなど、注意すべき事が多くあることがわかった。利用者に関わっていくうちに、利用者個々の生活・障害に合わせた介助・支援ができるようになりたいと感じた。また、つくし学校を担当し、他階の子ども達とも関わる機会ができた。障害のある子たちに応じた活動を考えるとこが難しかったが、子ども達の特徴を理解することで様々な活動をチームの方と一緒に考えることができた。つくし学校の中だけでも、他児と触れ合えることができるようになった子や、他児に順番を譲れるようになった子など、1人1人の成長を感じられた。

1番自分がやってよかったと思うことが挨拶だった。「失礼します」「お早う御座います」「〇〇さん、散歩終わります。また、行きましょう」等、挨拶は当たり前の事ではあるが、この施設で働いてからはとても重要なことだと感じた。時には自分の面白話などをお話することがあります。話せない利用者にも時折面白話をしていて、最初は一方通行のように自分でも感じたが、繰り返す中で、話を聞いて少し口角をあげたり、目をこちらに向けるなどの反応がありました。やはり、挨拶や声かけは生活の中で重要なんだと改めて感じた。

私の反省すべき点も、声掛けにあります。日々、おむつ交換時など関わりで「横向きます」「少し拭きます」など声掛けは意識している。しかし、早出や遅出・夜勤・リーダー業務などの業務を覚える事や担当利用者の事など無意識に自分の中で溜め込んでしまい「頑張らないと」と思っていた時期がありました。無言で関わったり、「〇〇するで～」 「散歩どこ行く？」など言葉使いが悪くなってしまうことがあった。先輩スタッフから注意を受け、気付いた反省するべき点でした。そこからは自分でも注意しながら利用者やスタッフの皆さんと話をしています。

これからも、利用者のその日の生活・障害に合わせて介助・支援を行い、たくさんのコミュニケーションを取ります。そして今、つくし学校チームと急変チームに入っているので、自己学習としてベビーマッサージインストラクターと乳幼児救急救命支援員の資格勉強にも励んでいます。1人1人の利用者が安全安楽に過ごせるように尽力いたします。

## 利用者父兄の声



### 「希望の子」

つくし幼保園 保護者会会長 紀岡進也

「ねえ、今日は幼保園休み？」「そうやで。」「やったー！」

土曜日朝の我が家のやり取りでした。長女の頃から、つくし幼保園にお世話になり始めて早10年。下の子が今年度卒園を迎える年となりました。最後の2年間、保護者会長を務めさせていただいて色々なことが見えてきました。

子どもたちにとって土曜日が待ち遠しく、親の私も仕事から解放されて我が子とゆっくり過ごすことができるのが土日でした。登園することを嫌がっている様子はないものの、お休みの日は、朝寝坊ができたり、近所のお友達と遊べたり出来るので魅力的な曜日になっていたのだと思います。コロナウィルス感染症が流行するまでは……。

子どもの様子が変わってきたのは、コロナウィルス感染症予防対策の一つとして、学校が休みになり、できる限り家庭での保育をするようになってきた頃でした。初めの頃は、家で居られることに喜びを感じていたようですが、段々と退屈になり、「お友達や先生に会いたい。」と言うようになってきました。そして私は、園が子どもにとってどれだけ大切な居場所であったかということに気づかされることになったのです。

幼保園は、働く親にとって、子どもを安心して預けることができる場所です。でも、それだけではなく、子どもにとっては、お友達と関わり合い、先生方に色々なことを教えてもらえるとても大切な場所であったことに気づかされました。コロナウィルス感染症が落ち着いて、登園できるようになった時のことは、今でも鮮明に覚えています。自分からかばんを持ち、「早く！早く！」と玄関で私を待つ姿。車の中では、「みんな元気かな。今日は、どんなことをするのか。」と、園での生活を心待ちにしている様子の会話が続いていました。10年通い慣れた道のりで、こんなに登園を喜ぶ我が子の姿を見るのも初めてでした。

このような中で保護者会長に任命していただき、自分に出来ることは何かと考えました。コロナ禍で制限されることが多い中、「だから出来ない。」ではなく、「でも出来る。」と考えて、子どもたちや先生方に寄り添っていきたくと思いました。私にできることは少ないかもしれませんが、私のように子どもを通して気づかされる幼保園の大切さを、一人でも多くの保護者の皆さんと共有できればこの上ない喜びです。

最後に、この緊張が続く中で温かく子どもたちの保育に携わってくださっている先生方や職員の方々に、感謝申し上げます。



もふもふ

## つくしっ子ニュース！！



## 小さな兄と大きな妹

和歌山乳児院 保育士

小川 綾香

僕はトイプードルの「ルル」。飼い主さんのお友達のお家でR2.5.12に生まれて、佐賀県から来たんだ！沢山の家族に囲まれて育った僕は一人っ子になったんだけど、すぐに妹が出来た。

妹は飼い主さんのお姉さんの家から来たんだ！その家の子がアレルギーが出てしまったらしく、僕の家と一緒に暮らすことになったんだ。最初は、僕より少し大きい妹だなあって思っていたけど、ドンドン大きくなって今は僕の何倍も大きいんだ！！でもお兄ちゃんだから、妹とはいつも遊んであげてるんだ！！

私はゴールデンレトリバーの「こはく」。R2.5.20に生まれたの。見るもの全部に興味があって、人も犬も大好きで毎日が楽しいの！！遊び相手に、何だか小さいくせにお兄ちゃんぶってくる家族が



いるけど、私が寝ている時は必ずくっついて

眠ってくるし、たまに私を枕にしたりしてくるのよ。でも、一緒に遊んでくれるから大好きだけど、お兄ちゃんだとは思っていないわ。だって私の方が大きいんだもん！いつも手加減してあげてるのわかってるのかしら？

飼い主は、毎日の散歩、休みにはドックランやキャンプに連れて行き、今日も笑顔で楽しそうに外に行こうと誘われ、暴れん坊2匹に振り回されていることを2匹は知る由もない。



## つくしっ子ミニ歴史！ 「一凛の薔薇」

2月14日！ 日本のデパートのチョコレート売り場は、毎年うら若き乙女で満員です。

女子から想う男子に、職場での義理チョコの配布、最近ではジェンダーレスの友達チョコ、自分へのご褒美チョコなど、全くバラエティーに富んでいます。たった一粒が1,000円以上もする某ブランドの舶来チョコなども、これは狂気か?!しかし実際よく売れているのです！

バレンタインデー！

その歴史は3世紀のローマに遡ります。

当時のローマ兵士たちは結婚を禁止されておりました。家庭を持つと兵士たちの戦う士気が下がると考えられていたからです。そこで、それを不憫に思ったキリスト教司祭バレンティヌスは内緒で兵士たちのために結婚の式を執り行っていたのです。皇帝の怒りに触れたバレンティヌスは西暦240年の2月14日に処刑されてしまいます。その後、彼の勇気は称えられ、語り継がれ、それから1000年以上後の1400年代に、恋人たちが互いに贈り物をする日として定着しました。

もうひとつ9世紀後半にヴェネツィアで起きた贈り物の話をしましょう。

ヴェネツィア総督の美しい娘 MARIA は一人の若者と愛し合っておりました。その結びつきをよしとしなかった MARIA の父、総督に認められたい一心で、その若者はある日戦いに出かけて行きました。必ず手柄を立てて戻ると信じ、待っていた MARIA のもとに届いたものは、戦いで重い傷を受けた若者が MARIA のために友人に託した一凛の白いバラでした。それを受け取った MARIA は、ショックのために倒れ、そのまま心の臓が止まってしまいました。なぜなら、その白バラは真っ赤な血で染まっていたのです。(と書くと皆さんは、「血は既に変色してそのバラは黒っぽくなっていたのではないかい?」と思われるでしょうが)

それは愛する人の血が付いた形見の花だったのです。そしてそれを見た瞬間に彼女も亡くなり、二人は天国で結ばれたのです。それは4月25日のことでした。

ということで、4月25日はイタリアがナチスドイツから解放された記念日であると同時に、ヴェネツィアでは愛する人に一凛のバラを送ってお祝いをする日なのであります。

(もちろん血の付いた白いバラの代わりに赤いバラにて代用いたします。)



## ある日の乳児院日記



### 和歌山乳児院 広報委員

#### 2歳児 Tくん

保育者が咳をすると「大丈夫～？」と聞いてくれます。Tくんが咳をしたとき保育者が「大丈夫？」と逆に聞くとTくん、「ありがとう！」と言ってくれる素敵な男の子です。

#### 2歳児 Eちゃん

夜勤で、こどもの入眠前にトントンしながら歌を歌っていました。「もう寝たかな？」と思って、保育者が、顔を掻きながらそっと様子を見ようとしたら「かいん？ねえ～？かいん？」と、、、想定外の質問と和歌山弁に笑わせてくれました。

## 編集後記

コロナウイルスが日本で初めて報道されたのは令和元年の初め頃でした。

最初はある程度でおさまるもの、と思われていましたが、もう3回目の春を迎えようとしています。この3年間私たちの生活はまさにwith Covid-19！しかし、必ず夜は明ける！と信じ、この令和4年が利用者と職員の皆さまにより素晴らしい年になりますように、そしてこの和歌山つくし会がいっそう大きく飛躍することを願って！Buona fortuna！！

つくしジャーナル編集部 谷本

